◆ 事業名「森が支える日本の技術 2022 公開セミナー」

事業団体　公益社団法人
全国社寺等屋根工事技術保存会

活用したふるさと文化財の森センター　京都市文化財建造物保存技術研修センター

活用した文化財建造物　清水寺（境内）
日吉大社（境内）

■事業の目的

檜皮葺や柿葺、茅葺など古来から伝わる伝統的屋根工事技術は我が国が世界に誇る文化であり、これらの技術を後世に継承することが伝統技術を保存する団体としての責務だと考える。そのためには、より多くの国民の理解を得るために知ってもらうことが重要です。文化財建造物保護のために必要な植物性資材の材料作成及び使用方法（技術）や人材（技術者）の育成を中心に保存技術について広く一般の方々を対象に普及啓発を図り、当該事業を通じ、文化財保護における資材・技術の重要性と、知識の習得の場を提供することを目的とする。

■事業の内容

（1）開催プログラム

1　檜皮採取実演：一般参加者対象
　日　　時　：　令和4年11月12日（土）10:00～15:00
　場　　所　：　日吉大社　境内林（滋賀県大津市坂本5-1-1）
　内　　容　：　当会檜皮採取指導員による技術の実演
　協　　力　：　日吉大社

2　資材確保への取組（パネル展示）：一般参加者対象
　日　　時　：　令和4年11月5，6日（土、日）9:30～16:00
　場　　所　：　京都市文化財建造物保存技術研修センター
　内　　容　：　（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会がこれまで行ってきた資材確保の取組とその資材の重要性を紹介。

3　資材を育む研修（森林整備：除伐）：文化財修理経験者及び一般
　日　　時　：　令和4年12月9日（金）13:30～15:30
　場　　所　：　嵐山国有林（京都市右京区）
　講　　師　：　林野庁　近畿中国森林管理局　京都大阪森林管理事務所
　　森林管理官3名
　内　　容　：　人と自然が作り出す四季折々の野山を広く世界の方々に楽しんでいただくため、紅葉する木を育てる。下草、雑木を刈り、風通しの良い環境を作り木の育成をするための管理・維持していくことの意義を学ぶ。

4　文化財講座：一般参加者、修理技術者対象
　日　　時　：　令和4年11月5日（土）10:30～12:00
　場　　所　：　京都市文化財建造物保存技術研修センター
　講　　師　：　鶴岡　典慶　氏
　内　　容　：「文化財建造物の魅力：木を鑑賞する」

（2）「未来につなぐ匠の技」～伝統的屋根工事技法の紹介～
　植物性の資材で葺かれる伝統的建造物を支えるための技術を紹介
　日　　時　：　令和4年11月5，6日（土、日）10:00～16:00
　場　　所　：　清水寺境内特設テント
　対　　象　：　一般参加者
　内　　容　：　檜皮葺きとその材料成型、屋根板の加工の実演

檜皮採取実演

パネル展示

森林整備：除伐

文化財講座

◆ 事業名「森が支える日本の技術 2022 公開セミナー」

（3）リーフレット等広報物の配布

清水寺周辺は、国内外を問わず多くの観光客が訪れる。コロナに対する規制が緩和し海外観光客が戻ってきた中、日本の誇る伝統技術（屋根工事技法）を発信するため、当会の選定保存技術について解説した日本語及び外国語版リーフレットを配布し理解を深めていただいた。

（4）SNSを利用した広報の実施

SNSを活用し、各種プログラムの広報にはネット媒体を使用して実施することで、文化財に関心をもつ人材の掘り起こしと、文化財を後世に残すための技術と資材確保のための取り組み、その活動の重要性を一般の方々に紹介する。

清水寺境内特設テント

■事業の成果

今年度は新型コロナに対する規制も緩和してきた事もあり、数年ぶりの外国人を含む観光客の賑わいとなりました。これにより清水寺でも多くの観光客に檜皮葺の実演見学や竹釘打ち体験をしてもらうことができました。また、日吉大社での檜皮採取の実演も多くの人に見てもらう事ができ、共に非常に興味を持ってもらう事ができました。メディア等を通して見たことがあるという人が多くなっていると感じることはありますが、やはり実際に見て、手に取ることによって深く印象に残ると思います。その為にも今後も引き続きこと事業を続けていきたいと考えています。

■事業の実施後の課題

（1）プログラムの内容について

観光客の多い清水寺境内特設テントや、日吉大社では多くの人に見てもらうことは容易だが、研修センターでのパネル展示等にももっと多くの人を呼び込めるような内容を検討していきたい。

（2）場所の課題について

日本最大の観光名所の一つである京都で行えることが今後も望ましいが、それ以外の場所を考えるとやはり観光客の多いところで、というのが理想的である。

（3）広報の課題について

今まで通りのポスターや紙面での広報は続けつつも、手軽で多くの人に見てもらいやすいSNSを使った広報にも積極的に取り組んでいきたい。

■今後の展開

以前と比べれば随分と認知されつつある我々の技術ですが、やはり若い世代に興味を持ってもらうというものが未だに課題ではあります。SNS等のネット環境を使った発信は心掛けてはいますが、まだまだ手応えを感じるほどではありません。幸い、毎年清水寺会場で行う事ができている実演や体験等の活動を地道に続けることを軸に、国内・海外を問わず多くの人に発信していることが重要かと思います。

◆ 事業名「『あなたの時間を有効に、伝統文化承継請負人になりませんか』第3回茅刈後継者養成講座」

事業団体	特定非営利活動法人 文化遺産保存ネットワーク河内長野	**■事業の目的**
活用したふるさと文化財の森	岩湧山茅場	**〇修理用資材の確保に対する支援体制づくり** **〇修理用資材の育成・採取・加工に関する担手の確保**
活用したふるさと文化財の森センター	滝畑ふるさと文化財の森センター	
活用した文化財建造物	登録文化財天野山金剛寺本坊大玄関	

■事業の内容

第1回「茅場環境整備実習」

■日時：令和4年9月11日（日）9時00分～14時30分　■会場：岩湧山茅場　■参加者：14名

■内容：集合場所からタクシー4台、軽動車2台に分乗して茅場に向かう。到着後、午前10時より主催者挨拶、注意事項の説明。その後場所を移り歴史的、地理的背景や保存、保全にかかる現状などの説明と茅場における灌木（主に萩類）伐採の意義と具体的な方法等を解説し、実習を行う。昼食を挟んで午後2時頃まで実習を実施。終了後下山して講評及び質疑応答ののち解散した。

第2回「金剛寺大玄関修理見学会」

■日時：令和4年10月2日（日）13時00分～15時00分■会場：天野山金剛寺（大阪府河内長野市）

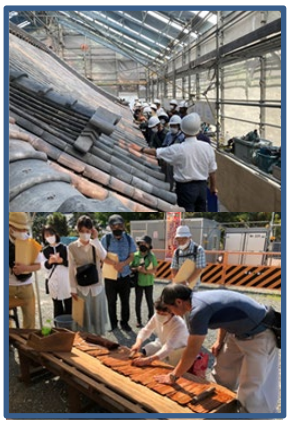
■参加者：53名

■内容：参加者を2班に分け、1班約1時間で登録文化財金剛寺大玄関修理の設計者の解説により修理現場で檜皮・瓦屋根解体状況を見学した後、隣接する重文摩尼院書院の見学を行った。また、もう1班は約1時間、修理現場そばに設営した「匠の技に触れる」と題する仮設テントにて5名の伝統技法を保持する職人による檜皮つくろい、鉋掛けの実演などの見学を行った。班を交代することによって、参加者全員がこれらの見学を行い、文化財、とりわけ文化財の修理用資材の育成・採取・加工の重要性に係る普及啓発を行うことができた。

第3回「茅葺き実習」

■日時：1日目 令和4年11月26日（土）10時00分～16時00分　2日目 令和4年11月27日（日）10時00分～15時30分■：会場①滝畑ふるさと文化財の森センター 特設仮設小屋組周辺②滝畑民俗資料館 民家棟■参加者：延べ67名

第1回「茅場環境整備実習」



第2回「金剛寺大玄関修理見学会」

第3回「茅葺き実習」

第4回「茅刈実習」

◆ 事業名「『あなたの時間を有効に、伝統文化承継請負人になりませんか』第3回茅刈後継者養成講座」

■内容：1日目令和4年11月26日（土） 実習会場の滝畑ふるさと文化財の森センターに仮設の木製小屋組みを設置。参加者は10時までに受付を終えて集合。挨拶とガイダンスの後開講。
まず、NPO職員によって屋根葺きに基礎的な説明と使用する荒縄の綯い方の解説を行い、参加者は荒縄綯いを実習。その後、仮設小屋組みの片面を藁葺きするために、参加者を2班に分け、1班は藁を使って苫作りに、もう1班は屋根葺き用具使用方法と藁を荒縄で縛る実習。仮設小屋組み片面の2割方の藁を葺いた時点で1日目の実習を終了。夜には参加者が約2時間NPO職員と懇親会を開催。ビデオなどを使い、これまでの岩湧山茅場保全の歴史や現状の課題などについて議論。また、他地域での茅場の事例紹介があった。
2日目令和4年11月27日（日） 2日目は1日目の参加者と入れ替えがあったが 午前10時に開講した。1日目の続きで藁葺きを進め、午後からは茅を使っての茅葺きを並行して実習。完了した15時30分頃にNPO職員の講評と質疑応答をもって実習は終了。この後、参加者は滝畑ふるさと文化財の森センター民家棟を見学後解散。
第4回「茅刈実習」
■日時：令和4年12月11日（日） 9時00分～15時45分■会場：岩湧山茅場・滝畑ふるさと文化財の森センター 茅倉庫■内容：参加者は集合後タクシーに分乗し、茅場のある岩湧山頂に向かい徒歩での参加者と合流。10時前からNPO職員が茅場の現状、環境、道具の使用方法・安全対策などの説明と鎌の使い方、茅の刈り方、刈った茅のまとめ方などを実地に説明を行った後、参加者が3班に分かれ、茅刈りの実習を行った。午後も引き続き実習し、刈り取った茅30束を3台の軽トラックに運搬、積み込みしし、NPO職員3人の手でそれぞれ積載した。14時過ぎに出発し、15時過ぎに滝畑文化財の森センター茅倉庫に到着後、全員で運搬してきた茅の荷下ろしと収納を行い、NPO職員が講師となり茅の保管方法を実習するとともに供給先や活用例、茅場の継続的な維持管理の継承の意義などについての説明を行った。
理事長講評の後、15時45分頃に解散。

■事業の成果

●修理用資材（茅・檜皮）の確保に対する地域での支援体制づくり
茅山整備・文化財修理事業の見学・茅葺き実習・茅刈り実習と一連の事業を実施し、参加者は植物性資材の茅の理解と実習により作業方法の習得がなされた。
●修理用資材（茅・檜皮）に関する効果的な普及啓発手法の開発
昨年度に引き続き公民館が生涯学習事業として「岩湧山頂の茅の育成と保存」の講座を企画し、当事業との連携事業として実施した。このことから、普及啓発事業の実施形態に広がりができた。

■事業の実施後の課題

●今回はコロナ禍が継続する中でも事業を実施することができたが、天候も含めてその開催判断が難しかった。
●また、茅刈り実習の日程については、茅の生育状況と天候から3月の初旬が最良であるが、中止になった場合、契約上、代替日の日程調整が難しなる。このことから少し刈り取りには早い12月に実施しているが、参加者が資材としての茅を理解するためには再検討を要する。

■今後の展開

●今後も、この企画を継続し、一人でも従事希望者が増えるように事業を実施したい。
●今回、参加者も一般参加者以外に文化財所有者、ヘリテージマネージャー、建築士、建築関係の大学生・大学院生の参加があったことから、より関心度の高い層にも参加を積極的に広報し、プログラムを組んでいきたい。

◆　事業名「茅葺き文化・文化財保護に関する普及啓発事業」

事業団体	静岡県富士宮市根原区	**■事業の目的**
活用したふるさと文化財の森	朝霧高原茅場	・修理用資材の確保に対する支援体制づくり ・修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発
活用したふるさと文化財の森センター	なし	
活用した文化財建造物	富士宮市指定文化財　井出家高麗門及び長屋	

■事業の内容

(1)　富士山茅葺きフォーラム（第5回）
◆日時：令和4年10月2日(日)13：00～15：00　◆会場：朝霧高原茅場茅倉庫　◆参加者40名
◆内容：一般市民を対象とした茅葺き文化・文化財保護に関する普及啓発を目指した。茅葺きと持続可能な社会（講師：筑波大学名誉教授）、国際茅葺きフォーラムで見た世界の茅葺き（一社日本茅葺き文化協会事務局長）の講演を行い参加者を交えて意見交換を行った。
(2)　ポスター展
◆第1回日時：令和4年10月2日(日)10：00～15：00　◆会場：朝霧高原茅場茅倉庫　◆参加者40名
◆展示内容：朝霧高原茅場の茅で修復した文化財の修復事例ポスター等8枚を展示した。　◆第2回日時：令和5年1月21日(土)-22日(日)10：00～15：00　◆会場：朝霧高原茅場茅倉庫　◆参加者36名。◆展示内容：ファーラムの講演内容である茅葺きと持続可能な社会、世界の茅葺きをテーマとしたポスター等12枚を展示した。
(3)　「茅葺きと持続可能な社会ー世界の茅葺きから見た茅葺きの可能性ー」冊子作成
◆フォーラムでの講演者の講演内容を写真と文章で示した冊子（A4-36頁280部）を作成しフォーラムや茅刈り講習会、茅葺き体験参加者及び関係者等に配布した。
(4)茅刈り講習会・茅刈り体験
◆日時：令和4年12月10日(土)-11(日)10：00～15：00　◆会場：朝霧高原茅場茅　◆参加者29名。◆茅刈り人の育成を目指した講習会で、実技講習は茅葺き職人さんの杉嵜靖司氏、学科講習及び茅刈り人検定は農大グリーンアカデミー講師木村悦之氏が講義を行った。

(5)　茅葺き体験
◆日時：令和5年1月21日(土)-22日(日)10：00～15：00　◆会場：朝霧高原茅場茅茅倉庫　◆参加者35名。
◆内容：フォーラムの講演で話題となった「茅壁」を茅倉庫内に造ることとして、壁下地づくりや茅付けの体験を行った。

芦澤英治富士宮市副市長の来賓挨拶

講演する筑波大学名誉教授安藤邦廣先生

講演する上野弥智代茅文協事務局長

◆ 事業名「茅葺き文化・文化財保護に関する普及啓発事業」

10月2日の茅倉庫内ポスター展

10月2日茅倉庫内でのフォーラム風景

12月10日　茅場での茅刈り講習会

12月10日茅刈り学科講習風景

1月22日茅倉庫内「茅壁」づくり体験

1月21日茅倉庫内ポスター展

■事業の成果

●フォーラム40名、ポスター展40名＋35名、茅刈り講習会・茅刈り体験29名、茅葺き体験35名の参加があった。「茅葺きと持続可能な社会」、「国際茅葺きフォーラムで見た世界の茅葺き」の講演では、火山地域だからこそススキ草原の存在があったと知った。茅葺きは日本だけではなく、世界中にあることに驚いたといった声が聞かれた。ススキ草原の維持や茅茅刈りの存続に対する理解と興味を深めることができた。

●茅刈り体験・茅葺き体験をとおしてフォーラムで話題となった「茅壁」づくりを行ったことは参加者にとってフォーラムの講演内容を体感し再認識する機会となった。

■事業の実施後の課題

●茅刈り人の育成を継続しているが、季節労働であることから人材の確保につながりにくい状況にある。茅刈り人の育成とは別に人材を募る情報発信などの検討が課題である。

●地域住民の高齢化で茅場となっている草原の維持が喫緊の課題となっている。

■今後の展開

●草原の自然観察会やススキウォークなどのレクリエーション利用を継続しながら、草原の多面的機能などの情報を発信して草原の存続意義などを市民などに広く周知する。

●茅場となっているススキ草原ではアズマネザサ群落の拡大が顕著となっており、良質なススキ茅の採取に影響を及ぼしつつある。アズマネザサ抑制に関する実証実験などを行っているが、これを継続して状況を周知することで良好なススキ草原を育成することとする。

◆ 事業名「日本産漆の増産に向けて漆の安定供給と漆掻き技術を考える」

事業団体	日本漆アカデミー	**■事業の目的**
活用したふるさと文化財の森	弘前市有漆林、大子漆の森、常陸大宮市家和楽漆林	漆掻き技術の研修会、重要文化財の修復やふるさと文化財の森の見学及び漆サミット2022 in 茨城を行うことにより、漆掻き職人等と今後のよりよい漆掻き技術を考え、日本産漆の増産や安定供給を目指す。
活用したふるさと文化財の森センター		
活用した文化財建造物	長勝寺，鹿島神宮	

■事業の内容

(1) 漆掻き技術の研修会と重要文化財の修復の見学

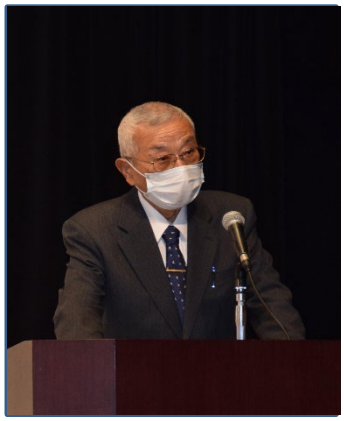
今後のよりよい漆掻き技術を考え、漆掻き職人等との情報共有を図るため、漆掻き技術の研修会が10月28日（金）に弘前市有漆林で開催された。研修会では岩手県浄法寺漆生産組合の漆掻き職人瀬古昌幸氏が漆掻き技術を解説し、漆掻きの道具や漆の採取法等の情報が共有された。一方、弘前市有漆林の漆で修復した重要文化財の普及啓発を図るため、重要文化財修復の見学が10月29日（土）に長勝寺で行われた。見学では弘前市教育委員会文化財課課長補佐小石川透氏、津軽塗技術保存会会長今照芳氏と副会長白川勝義氏が長勝寺の修復状況等を解説した。漆掻き技術の研修会と重要文化財修復の見学は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、参加者がそれぞれ23名と少なかった。

(2) ふるさと文化財の森の見学

分根苗の植栽によって造成された常陸大宮市家和楽漆林の普及啓発を図るため、常陸大宮市家和楽漆林の見学が11月12日（土）に常陸大宮市で行われた。見学では奥久慈漆生産組合組合長の神長正則氏、奥久慈漆生産組合の岡慶一氏、奥久慈うるし振興会会長菊池三千春氏がウルシ林の管理や漆掻き技術等を解説し、ウルシ林の管理技術や管理費等の情報が共有された。常陸大宮市家和楽漆林の見学は、コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、参加者が24名と少なかった。

漆掻き技術の研修会

ふるさと文化財の森の見学


基調講演を行う稲川武男氏

見学した鹿島神宮楼門

◆ 事業名「日本産漆の増産に向けて漆の安定供給と漆掻き技術を考える」

(4) 漆サミット2022 in 茨城

国宝・重要文化財の修復の普及啓発と今後の漆の採取技術の情報共有を図るため、「日本産漆の増産に向けて漆の安定供給と漆掻き技術を考える」と題し、漆サミット2022 in 茨城が12月9日(金)～11日 (日)に茨城県水戸市のザ・ヒロサワ・シティ会館と鹿島神宮で開催された。漆サミット2022では9日に開会式の後、NPO法人結代表塩原慶子氏が「文化財活用においてママチームが漆と出会うまで」、粟野春慶塗職人稲川武男氏が「水戸藩と粟野春慶塗」の題目で基調講演が行われた。昼食をはさんで「漆」をめぐる学際的な最新の研究成果等に関わる7件のポスター発表が行われた。その後、日本産漆の増産に向けた漆の安定供給と漆掻き技術に関わる講演が行われ、講演ではNPO法人壱木呂の会理事長本間幸夫氏が「原木資源の少ない時代の漆掻きを考える」を、竹内工芸研究所代表竹内義浩氏が「メサシ有無の違いによる漆採取量と今後の課題」を、奥久慈漆生産組合富永司氏が「留め掻き後の漆掻きを考える」を、奥久慈漆生産組合組合組合長神長正則氏が「日本・和風中国式漆掻きによる漆採取量と課題」を、岩手県浄法寺漆生産組合瀬古昌幸氏が「浄法寺漆生産の現状を考える」の題目で発表した。その後、森林総合研究所東北支所田端雅進氏の司会で講演者5名によるパネルディスカッションが行われ、「漆の安定供給とこれからの漆掻き技術に向けて」の情報が共有された。10日は午前に「北関東における資源利用史」に関わる講演会が、その後、昼食をはさんで「漆」をめぐる学際的な最新の研究成果等に関わる7件ポスター発表が行われ、午後は「日本産漆を活かした地方創生の取り組み」に関わる講演会が行われた。11日は重要文化財修復の見学が鹿嶋市の鹿島神宮で行われた。見学では鹿島神宮権禰宜外塚俊一氏と堀田真史氏が漆や檜皮を使った重要文化財の修復状況等を解説した。9～10日は現地とオンラインでの参加を併用したハイブリッド形式で漆サミット2022が行われたため、新型コロナウイルス感染症拡大の影響はみられたが、11日も含め参加者は222名であった。

■事業の成果

●漆掻き技術の研修会、重要文化財修復の見学、ふるさと文化財の森の見学及び漆サミット2022を行うことにより、今後のよりよい漆掻き技術を漆掻き職人等に広め、日本産漆の増産や安定供給を目指すことができた。
●新型コロナウイルス感染症拡大の受ける中、長勝寺、鹿島神宮及び常陸大宮市家和楽漆林を訪れ、修復された重要文化財やふるさと文化財の森を見学した他、長勝寺、鹿島神宮及び大宮市家和楽漆林で話を伺い、重要文化財修復やウルシ林造成の大切さや課題等を学ぶことができた。

■事業の実施後の課題

●日本産漆の採取にとって重要な漆掻き技術を漆掻き職人等に広く普及することはできたが、採取に必要なウルシ林の造成・管理技術の普及啓発は喫緊の課題である。
●新型コロナウイルス感染症拡大の影響に配慮し、講演会等で一般の方や行政担当者等に参加してもらうことは依然として難しい課題である。

■今後の展開

●講演会やセミナー等を行う際に、今後も現地とオンラインを併用したハイブリッド形式での参加も考え、より広く一般の方や行政担当者等に国宝・重要文化財の修復及び修復に不可欠な日本産漆等を普及啓発する予定である。
●日本産漆の増産や安定供給のためのウルシ林造成等に関わる研修会及び国宝・重要文化財の修復に不可欠な日本産漆の特性や評価に関わる講演会を開催する予定である。

◆ 事業名「沖縄の茅（ヤンバルダケ）の育成・採取・加工と茅葺きに係る普及啓発事業」

事業団体　一般社団法人日本茅葺き文化協会

■事業の目的

〇修理用資材の確保に対する支援体制づくり
〇修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発
〇修理用資材の育成・採取・加工に関する活動
〇修理用資材の育成・採取・加工に関する担手の確保
〇修理用資材の育成・採取・加工に係る他組織との連携、情報共有

■事業の内容

（1） 茅（ヤンバルダケ）の育成・採取・加工等の研修プログラム

①茅刈り体験研修　日時：令和4年12月10日（土）　**会場**：国頭村のヤンバルダケの茅場　**参加者**：37名

参加者は11都府県から学生や地元の建築関係者が中心で、平均年齢は39歳であった。沖縄では、沖縄本島北部ヤンバル地方の国頭村森林組合で整備している林道沿いに生育するリュウキュウチク（ヤンバルダケ）を茅として使用しており、この茅場にて茅刈り体験を行った。同組合内で茅採取の技能と知恵を継承している唯一の職員である賀数氏を講師とし、適齢の良い茅の見分け方、刈り方、束ね方、運搬や保管方法までの一連の技能を教わった。

②-1茅葺き体験研修　日時：令和4年12月11日（日）　**会場**：海洋博公園おきなわ郷土村　**参加者**：43名

海洋博公園おきなわ郷土村に復元された与那国の民家の葺き替え現場にて、リュウキュウチクの茅葺き体験研修を行った。参加者は3班に分かれ、茅ごしらえ、屋根葺き、差し茅を順に体験した。茅ごしらえは、屋根葺き用と差し茅用の二種類をつくり、その茅を用いて屋根の軒付けから平葺きの工程を行った。同郷土村内の神アサギにて、傷んだ屋根の補修方法である差し茅も学んだ。

②-2茅葺き技術研修　日時：令和4年12月12日（月）・13日（火）　**会場**：海洋博公園おきなわ郷土村
参加者：6名　一般向けの茅葺き体験研修の後に、中級の茅葺き職人を対象に、地元の職人らと共に茅葺き技術研修、技術交流を行った。参加したのは、逆葺きの共通した技術を持つ奄美の職人の他、本土の笹葺きの経験がある職人ら6名。現場で葺き替えを行っている地元の職人らと共に、茅ごしらえ、屋根葺きを行った。

③茅の育成・採取・加工等に係る講義　(1)茅葺き文化講座1　日時：令和4年12月10日（土）
会場：オクマプライベートビーチ＆リゾートハイビスカスホール　**参加者**：40名
(2)茅葺き文化講座2　日時：令和4年12月11日（日）　**会場**：海洋博公園海洋文化館2階ステージ　**参加者**：50名　茅刈り体験研修とあわせて、国頭村森林組合の賀数安志氏「沖縄の茅と屋根葺き、その暮らし」の講義を、茅葺き体験研修とあわせて、宮平設計の中本清氏「沖縄の茅葺きの材料と特徴」、沖縄琉球赤瓦漆喰施工協同組合の田端忠氏「かや建築の過去と現在と未来」、中村工務店の中村博志氏「奄美の茅葺きの技能」、筑波大学名誉教授の安藤邦廣氏「沖縄の茅葺き屋根の地域特性」の講義を行った。

（2） 茅（ヤンバルダケ）の育成・採取・加工等に係る教材の作成・配布

沖縄のリュウキュウチクの茅刈りと茅葺きの記録を行い、それらを「沖縄の茅（リュウキュウチク）の茅刈りと茅葺き」として記録映像を作成した。これらを、ふる森選定地のほか、沖縄の各市町村、教育委員会、図書館、沖縄県建築士会、茅葺き職人連合、国際茅葺き協会等に配布するとともに、広く公開した。

茅刈り体験研修

茅葺き体験研修

茅葺き体験研修（差し茅）

茅葺き文化講座2

◆ 事業名「沖縄の茅（ヤンバルダケ）の育成・採取・加工と茅葺きに係る普及啓発事業」

■事業の成果

（1）茅採取　1．ヤンバルにおける森林環境の変化と茅場の消失　地域住民の生活資材としての木材の定期的な伐採によってリュウキュウチクの生育環境が保たれてきたが、生活様式の変化とともにその生育環境も変化し、茅場も消滅の危機にあることが分かった。
2．現在のリュウキュウチクの生態と利用の実態　現在は、国頭村森林組合による林道整備によってリュウキュウチクの生育環境が生まれ、茅として採取され利用されている。その林道沿いのリュウキュウチクの自生している総面積はおよそ4～5haである。この竹林も周辺の森林の育成に伴って、必ずしも持続的なものではない。
3．茅採取の担い手の現状　屋根葺きに適した茅の適齢期、採取の時期、方法、それらの技と知恵を継承している国頭村森林組合の職員は一人で、今年の採取の実績は約3000束である。
4．茅採取の担い手育成と技能の継承　茅刈り体験研修によって、茅として適期である3～5年生の竹の見分け方、刈る際の鎌の角度と動作、葺き茅は長さ1．7m、差し茅は1．4m程度を目安に刈り、葉先を揃えて1束が直径20cmになるよう120本程度を束ね、その茅を風通しのよい日陰で立てて3週間程度乾燥して屋根葺きに使用する、という一連の茅採取技能を学ぶことができた。また、これらの知恵と経験を地元からの参加者、奄美地方および本土の茅葺き職人や技術者に広く共有し、技能の継承と人材育成の一助とできた。さらに、記録映像を作成し各所に配布することで、世界自然遺産やんばるの森の中に自生し利用されてきたリュウキュウチクの重要性とその保全活用についての理解を深めるための一助とすることが期待される。未来のリュウキュウチクの茅場の維持管理や茅採取の人材育成につなげることができる。
（2）茅葺き　1．茅葺きの担い手と技能の継承の現状　現在、リュウキュウチクの茅葺きを継承する職人はおらず、茅葺きを経験した地域住民も高齢化して葺くことはできない。その技能の継承は危機的状況であり、残された文化財の茅葺きを維持補修しているのは、赤瓦の屋根葺き職人数名である。これらの職人は工法の文献記録や写真記録をもとに技術を習得して、技能の継承を行っているが必ずしも十分ではない。
2．茅葺きの担い手育成と技能の継承　リュウキュウチクで棟を積み、みの茅としてチガヤ（マカヤ）を用いて雨仕舞をすること、茅葺きにはリュウキュウチクで逆さ葺きをする方法と、チガヤで逆葺きとした上にリュウキュウチクを差し茅して葺き重ねる二種類の方法があることがわかった。茅葺き体験研修を行うことで、これらの基本的な技能を次世代へ伝える一助とすることができた。さらに、軒付けと平葺きについての記録映像を作成し各所に配布することで沖縄の茅葺きの技能の継承にも寄与することができた。
3．奄美地方や本土の茅葺き職人との技術交流　逆葺きや笹葺きの類似の技術を継承する地域である奄美地方や本土の茅葺き職人と、沖縄で茅葺き継承をはかろうとしている赤瓦の職人の技術交流をすることができた。そして、沖縄の茅葺きの特徴や技能を継承する上での課題を明らかにすることができた。

■事業の実施後の課題

1．リュウキュウチクの使い分け　屋根材としての適切な年数や太さ、刈り方、葉先を揃える束ね方などについては学ぶことができたが、リュウキュウチクは屋根葺き材料だけではなく、茅葺き民家の壁や下地にも使われている。その使い分けについて研修及び記録が必要。
2．沖縄の茅　沖縄の茅葺きにはリュウキュウチクに加えてチガヤも用いられていることが分かった。リュウキュウチクについては、茅刈りと茅葺き研修およびその記録をすることができたが、チガヤについても、その採取や葺き方について、技能継承と担い手育成のため、同様の研修及び記録が必要。
3．茅葺き技能　リュウキュウチクを用いた逆葺き、屋根葺きの軒付けと平葺きについては体験研修と記録を行うことができたが、チガヤを用いた屋根葺き方法についても同様の研修と記録が必要。
4．地元への普及啓発　参加者は地元や本土からの建築関係者が多かった。より広く地元の学生や一般市民に周知し普及啓発をはかることが必要。

■今後の展開

1．リュウキュウチクの使い分け　今後、屋根葺き材料だけではなく、茅葺き民家の壁や下地を含めたリュウキュウチクの使い分けについても、体験を通じて経験者から学び、その技能を継承する。
2．沖縄の茅　チガヤとリュウキュウチクの使い分けについて、体験研修を通じて、その技能の継承と担い手育成をはかる。
3．茅葺き技能　チガヤを用いた棟仕舞いについて、そしてチガヤを葺いた上にリュウキュウチクを差し、茅で葺き重ねる体験研修を通じて、その技能の継承と担い手育成をはかる。
4．地元への普及啓発　今回の報告書や映像によって地元高校、大学へ広く周知して、幅広い参加を得た研修を行う。